

## 倉橋惣三先生をしのぶ



山下俊郎

しばらくぶりに、この幼稚園の遊戯室に参りまして、まことに感慨無量なものがあります。

今日、私はあまり難しいことは申し上げないで、「倉橋先生の人がらと考え方」というものを、まわりから眺めるというような立場でいろいろ申し上げてみようと考えております。ことに倉橋先生が会長をして下さいました日本保育学会、この学会のことなどをお話し申し上げたいと思います。

倉橋先生のことにつきましては、今までも書いて話したりしたことがあるのですが、その一つは、歴史的文献になつてゐる「幼稚園八十年のあゆみ」です。これは、「幼稚園九十年のあゆみ」が昭和四十一年でしたから、その十年前、昭和三十一年ですね、

三十一年に、文部省で出している「初等教育資料」という月刊誌の中に、「幼稚園八十年のあゆみ」という特集号を出したのであります。その中に、幼稚園の創設期から当時に至るまでのことを、いろいろな先生方が書いていらつしゃるものがあるのです。このお茶の水の幼稚園については、お亡くなりになりました及川ふみ先生がお書きになっていらつしゃいます。そして、私が「幼稚園と倉橋先生」という文を二ページほど書いています。

先生がお亡くなりになりましたのは三十年でした。それからちよど十年たった四十年に、日本幼稚園協会主催で、倉橋先生をしのぶ会がありました。その時、私はお話しするために資料をいろいろ引っくり返し整理しまして、昭和四十年七月二十三日に、

「日本における幼児教育と倉橋先生の思想」というお話をしたわけです。その時、日本教育学会長をずっとしておられた海後宗臣先生―教育学者で、私と大学時代に一緒だったこともありすが、私は心理学の方で、海後先生は教育学の方でありますけれども―が、やはり倉橋先生についてお話しになりました。

この時には、倉橋先生が亡くなられて十年たつというのに、現在あります「倉橋惣三選集」というのはありませんでした。戦後、先生がお出しになりました本といたしましては、「子供讃歌」という、文化勲章を受けられた東山魁夷画伯が描かれた絵が表紙になってい本があります。それからもう一つは、「幼稚園真諦」です。この本の表紙にも東山画伯が絵を描いておられます。私はこの「幼稚園真諦」と「子供讃歌」を基にしてお話し申し上げたのであります。

「幼稚園真諦」は、昭和九年に出版された「幼稚園保育法真諦」を復刊されたもので戦後二十八年三月に、その時書かれました論文の終りに、先生は「初版後年を経ること約三十年、久しい絶版の後、ここに復刊を試みるのはわたしの考えが、尚この枠の中を往来しているからである。尚またその実現をみることの少ないのを慨くからである」と書いておられます。幼稚園の保育に対する先生のお考えは、現在では、この「幼稚園真諦」の中に集約され

ていると思います。昭和八年に、先生が、今の日本幼稚園協会の夏の講習会で話しになりました速記を基にして、昭和九年にお出しになったのが、「幼稚園真諦」になったわけであります。（この二つの本は、今は倉橋惣三選集に収録されています）

倉橋先生はよく私に「君、ぼくは芸術家だからね」と言っておられたのです。文章が、今の若い皆さんから見れば、クラシックな文章だと思えますが、非常にお上手でした。また、お話も大変にお上手で、いつの間にか引き込まれてしまうというよう方です。

#### 倉橋先生と私の出会い

倉橋先生と私との出会いということから申しますと、たしか昭和六年だったと思います。私が大学を出て三年たったころ、当時文部省の仮分室というのが、お茶の水の、多分今の東京医科歯科大学がある所、かつての東京女子高等師範学校があった所になりました。そこに仮に標札がかかっている、「文部省分室」と書いてあったと思います。その場所で、大分前に亡くなられた方ですけれども、青木誠四郎先生という日本の児童心理学の先生の先生が当時の大日本聯合婦人会の家庭教育相談所というものを始めになり、その仕事を「君、手伝ってくれ」と言われましてお手伝

いしました。私は大学出たてのほやはやの心理学者でして、子どもの心理テストを担当しました。いろいろの問題児の相談が出て来るので、精神科のお医者さんが必要だということがアメリカなどで当時やっていた教育相談所の組織を研究された青木先生の考えの中に出て参りました。そして、当時東大の精神科の助手をしておられた清水健太郎という日本における脳外科の開拓者で、のちに世界的に有名になった方がおられました。その清水健太郎君と私が青木先生と一緒にいろいろの相談を親から受けたわけです。

たまたま相談所を開いている時に、倉橋先生が、そこへお見えになりました。先生は当時東京女子高等師範学校の教授でいらしたのですが、兼ねて文部省の社会教育官をしていらっしやったのです。そこで、先生は幼稚園関係の先生方に、夏休みやその他の機会に全国をまわってお話なさるといふようなことと並んで、お母様方、いわゆる社会教育の中で、今日言う母親教育をするために、動いていられた時分です。ある日先生がその相談所に来られて、初めてお目にかかったわけです。それが一番初めですが、何もお話ししたことを記憶しておりません。教育相談も母親教育の一つですから、君しっかりやりたまえといふようなおはげましを頂いたのでしよう。大先輩としての印象が強かったことが記憶

に残っています。

その後、私が現在おります東京家政大学教授として参りますまでにおりました愛育研究所、そこに教養部という部がありました。これは、教育と心理学の面から母性と乳幼児の研究をする部門で、そこに私は属しておりました。その教養部長が、すでにお亡くなりになった、東大教育学部の教授であった岡部弥太郎先生でありました。この先生が私共教養部員を集めて、毎週土曜日に(当時助手まで入れて七、八人だったと思います)は、研究の計画進行、結果などを話し合いをしたのです。その初めのころに、研究所の顧問でいらした倉橋先生は毎週おいでくださいます。その席でいろいろ私共に助言をして下さったのであります。そのころからたびたび、先生のお話を承るといふ機会が出てきたわけであります。

本格的にと申しましょうか、倉橋先生と個人的接触を持つようになりましたのは、終戦後であります。終戦後、新しい現代の教育体制というものができるようになりました場合に、先生は、当時は教育審議会という名前だったと思いますが、その委員をしていらっしやいました。戦後、アメリカの教育使節団が二回にわたって参りました。その中には、当時のアメリカの教育学者、教育心理学者が含まれておりまして、私共が知っているアメリカの心

理学者で、当時指導的な立場にいた相当な大家が含まれていました。そういう方々と接触して、日本の教育というもののあり方はいかにあるべきかということについて、倉橋先生は非常に努力なさって、向こうの人々と折衝なさったのです。その時に先生が、「幼稚園教育は義務教育にすべきである」ということを提言なさったはずであります。そういう提言をするということについては倉橋先生は、「それをバックアップするような一つの学問的、学術的な組織が必要である」ということを強く言っていたらっしゃいました。まだ日本保育学会ができていなかった昭和二十一年か、二十二年のころのことだったと思います。その教育使節団に、意見書をお出しになりました。(その意見書は、保育史の研究者である明星大学の岡田正章教授の所に当時の資料を渡してありますので、今は私の手元がありませんが)その時、倉橋先生は、幼児教育に関するアカデミーの総裁と申しましょうか、プレジデントという肩書で、向こうにものを言うという感じで、先生のお考えを英文に直して、タイプして、向こうに渡したのです。義務教育は、未だに実現されておりませんが、当時そういう考えが倉橋先生の頭の中にあつたことを、私共は知っておいていいことだと思っています。

倉橋先生の幼児保育に対するお考えについては、(私は「幼児

保育」という言葉が大好きです。「教育でござい」と言う姿勢で、いろいろのことを詰め込むのは、幼児保育の真の姿ではないのです)たしか及川先生が、日本保育学会会報の追悼文に書いておられたかと思うのですが、「幼児の生活を重視しなくてはならない」ということを倉橋先生はいつも強く言っておられました。その先生の文句を、引用していらっしゃるのです。「生活を、生活で、生活へ」と、生活を三つ重ねた文を使っているのです。出発点を幼児として、その生活をよくちゃんと見つめるというように、「生活を、生活で、生活へ」という考え方です。これは、幼児の生活を大事にして、私の言葉に直していえば、幼児らしい生活をさせるということです。幼児期でなければ、子どもが身につけることができないようなことを、身につけさせるような生活をさせる、これは、アメリカの学者の間でいっていますが、発達的課題ということで、つまり、幼児期というものの発達に即した課題が、幼児らしい生活をさせて、その生活を充実させる、まず生活を認める。つまり、先生が、生活から出発するということに、一番の重点を置いて考えていらっしゃったことは、どなたも認めていることです。先生は、「子供に触れること。子供と共にあること。子供の所にいること。子供から出発すること」といった言葉を、「子供讃歌」の中でも言っておられます。

## 倉橋惣三先生と子ども

先生は、小学校時代はどうか存じませんが、静岡県の方だと存じております。昔の東京府立一中（今の日比谷高校）を経て、昔の第一高等学校に入り、今の東京大学文学部で、昔は哲学科と申しまして、その中に心理学専攻があったのですが、そこで心理学を勉強なさったわけです。高等学校の時分から、今のお茶の水の幼稚園に入り浸っておられました。当時一高は全寮制度でしたので、寮に入っておられたと思います。そこから今の東京医科歯科大学のある所にあつた、女子高等師範学校の幼稚園に、（多分歩いて）よく出かけられました。子どもと一緒に遊んで、子どもの中に入り浸っておられて、本当に子どもと一緒に生活をずっと続けて来られたようであります。東大で心理学を勉強なさつて、心理学においても私の大先輩でいらっしゃいますが、それを保育に生かそう、子どもの心理を勉強しようなどというお考えではなかっただろうと思います。先生という方はそういうお人柄で、本当に子どもと一緒に生活することの中から、自然ににじみ出て来たものが、先生の保育に対する考え方を育てる非常に大事な地盤になったと言えるのです。倉橋先生は、大学を卒業なさつて、大学院にいらっしゃる間も、やはりずっと幼稚園に行

つていらっしゃつたのです。子どもと接し、本当に子どもの生活の中に入り浸つて、そこからにじみ出て来るものを、先生の保育に対する考え方の中に浮きぼりにされ、浮かび出されたものが後に「幼稚園真諦」になったのだと、私は考えます。

倉橋先生が、東京女子高等師範学校の講師になられたのは、明治四十三年です。そして、保育関係の仕事をしておられたということも、よくおっしゃつたり、書かれたりしておられます。教授になられたのは大正六年で、同時に幼稚園の主事、今で申しますと、幼稚園園長におなりました。その後、大正八年から十一年まで、文部省の海外研究員としてアメリカ及びヨーロッパにいらして、アメリカの幼稚園、ドイツのフレーベル幼稚園のあと、イギリスの幼児学校などを幼稚園などを訪ねられ、いろいろとお感じになったことがあるようです。

先生がお書きになった本を読むかぎりにおいては、当時アメリカにおいては、進歩主義教育が先端を切つていたようです。このことは、「幼稚園保育法真諦」の中で、よくおっしゃっています。

### 日本の幼稚園

#### — 倉橋先生の「新保育理論」 —

日本に幼稚園ができたのは、明治九年で、それがこの幼稚園

で、今の東京医科歯科大学のある所にできたのであります。さ去年でちょうど百年になります。その当初から、この幼稚園で保育の実践をし、また、指導に当たったのは、松野クララ夫人でありまして、アメリカで、フレイベル流の幼児保育の勉強をして来られた方です。

このフレイベル主義というフレイベリアン、特に正統派フレイベリアンは、フレイベルの考え出したものが、実は、「だんだん末の末に走り、末梢化し、形式化している」と先生は考えておられました。つまり、幼児の生活を見るところをしないで、ただ形式的にフレイベルの恩物を用いていたのです。これに対して倉橋先生は、アメリカの進歩主義教育者たちと話したり、その中に「ヒルの積木」を作ったヒルもいますが、また、進歩主義幼稚園をご覧になったりして、「自分の意見と本当にびつたりだ」と感じられたようです。それからヨーロッパに渡られて、「フレイベルの精神は学ばなければならないが、いわゆる正統派フレイベリアンの末梢主義、末の末に走るのは甚だ良くない」とお感じになったようです。ところで、そのようにはつきりといわれるようになったのは、大正六年に幼稚園の主事になられた時からですが、そこで、幼稚園のあり方を、先生の考えていらつしやるとおりに、実際に実現するということが行われてきたわけです。しかし

それ以前にも、関西の保育会に招かれて、新保育理論、すなわち、先生の新しい考えに従った保育理論について、お話しなさつていらつしやいます。これは、明治の終りから大正の初めに行われた、フレイベルの末梢主義に対する大きな反撃であります。

この末梢的な扱い方をされてきた恩物に対する先生のお考えの一つを現わすこととして、恩物の積木を皆集めて、遊具としてまぜこぜにして、竹かごの中に放り込んでしまわれたということがあります。このことは私も学生に知っているのですが、恩物としての積木は、一インチ立方という、非常に小さな物です。そんなに小さい物は、幼児には扱うことが苦手なので、現代の幼児心理学の知識からいえば、そのように小さいものより、体全体で遊べる体制をつくらなければなりません。そういうお考えから、「積木というフレイベルの恩物は、その背景にあるフレイベルの思想からは学ぶべきことはたくさんある。たとえば、積木を積むことによって、形の美しさなど、いろいろ引き起こすことができる。しかし、あのように小さい物ではなく、大きい物でしなさい」というお考えでした。今日の幼稚園では、フレイベルの恩物をそのまま使っている所は、存在しないであろうことを私は信じています。

もう一つ、遊戯室に掛かっていたフレイベルの肖像画ははずし

て、職員室だったと思いますが、そこに持っていかれまして。今日何年ぶりに参りましたら、園長室には掛かっておりませんでした。とにかく、「フレイベルは、先生がフレイベルに学ぶべきであって、子供がフレイベルを見て、どうこう言うものではない」という精神を非常に強調なさっていました。このことについては「子供讃歌」の中に書いてあります。

そのようになさって、新しい保育の考え方ができたのであります。しかし、そのころは、時間を区切って「ここは積木の時間、ここは何とかの時間」というような時間割り主義が非常に横行していました。時間割主義は好ましくないのですが、このことは先生方にも改めて考えていただきたいと思うのですが、「子供の生活をちゃんと見て、それをどういうふうに生かすか」ということを考えられて、でき上がったのが、いわゆる「誘導保育案」であるわけです。これを守っていかなければなりません。

## 幼稚園

「幼稚園」の名称は、明治の初めから使われています。この原語は「Kindergarten」で、フレイベルが名付け、正式に用いられるようになったのは、一八四〇年ということです。この「Kindergarten」を、明治の初めに、「幼稚園」と訳しました。現在の「学

校教育法」ができる時に、「幼稚園というのは学校である」と言うので、「学校教育法第七章」に幼稚園のことが書かれてあります。

「幼稚園」という名前はそのままでもいいのかということについて、教育審議会で問題になったり、文部省の中でもいろいろ話があったりしたらしいのです。しかし、先生は頑として、「変えてもらっては困る」と非常に強く主張なさいました。「Kinder」は子どもの複数で、「garten」は園ということから「幼稚園」となっているのですが。当時、幼稚園のこのみならず、小学校を含めてですが、その責任の課長が、この幼稚園の前々園長であった坂元先生なのです。私がうかがった話では、倉橋先生が坂元先生に「いろいろ考えてくれるのはありがたい。が、われわれ明治から幼児の教育に専心してきた者にとっては、『幼稚園』という言葉の中に幼児への愛情、幼児教育の伝統というものの結晶したものがあつた。『幼稚園』という名前は絶対に変えないでほしい」とおっしゃったそうです。それで「幼稚園」という名前が残ったわけです。

「君、『幼稚園』というのは本当にいい名前だよ。つまり、子供の園であつて、幼稚園の先生や園長というのは園丁だよ。幼稚園の先生は、園長も含めて、子供の花園を守る園丁だ」というお話

を、何回か直接に先生からうかがいました。それは、結局、「子供と共にあって、子供の中に入って、子供を育てていく」ということです。私は、「保育」という言葉に、その意味が一番はつきり出ていると思うのです。「私は、保育ということばをこよなく愛する」という文を、ひかりのくにから出している「保育」という雑誌に、書いたことがあります。倉橋先生のおっしゃる「園丁」という言葉が、先生の口から出ることは、「保育」という考え方につながっていくのではないかと考えます。

### 戦時中の幼稚園

太平洋戦争中には、「幼稚園は、坊ちゃん嬢ちゃんに行く所で、ゼイたくだからやめてしまえ」という、幼稚園廃止論がずいぶん出たものです。しかし、私共は、「どこまでも子どもを守らなければならぬ」と考えておりました。が、「戦争に協力するためには、幼稚園という甘っこちよいと考えて、子どもを甘やかすのはよくないからやめてしまえ。そして、戦時保育所に切換える。子どもを戦時保育所に預けて、お母さんは兵隊さんの衣服とか、飛行機の材料などを造る工場で働け。そのために戦時保育所を造るのが望ましい」という議論が方々から出ました。そして、この幼稚園廃止論が一時非常に盛んになりました。

実際に戦争が激しくなってきた、空襲が行われるようになりまして、空襲は都会に集中しますから、したがって、「幼稚園は危い」ということになりました。そこで、事実、閉鎖される幼稚園は、全国的にみて非常にたくさん出て、戦争が始まる前に比べますと、終戦直後にはたしか全国で千くらい減っております。この幼稚園もそういうことで一時閉鎖されました。子どもは、とにかくおとなが守り育て、成長させるという責任をわれわれは持っているのです、戦争から子どもを守ることは、われわれに課せられた非常に大切な仕事です。そういう考えを私たちはずっと持つておりますので、倉橋先生のお考えになったことは、どこまでも貫かれたのでありますが、大勢に逆らうことができなくなり、遂に幼稚園が閉鎖されるようになったのであります。

同じようなことが、たとえば児童文化財、これは私自身に関係することがありますが、その一つとして幼児の絵本についても言えます。内容に戦時色を盛らなければ、紙を配給してもらえないというように統制され、自由に出版社が紙を使えません。そういう状況でありましたので、内容を検閲して、紙を配給することが行われたのであります。つまり戦争協力的であれば紙が配給されるが、それ以外は紙をもらえないのです。私の関係している出版社などは、「こんなものは戦時色がないからだめだ」と言って、



私がいゝる助言をして作った絵本でしたが、「これでは紙をも  
らえないから内容を変えましょう」というようなことを言われた  
記憶があるのです。そういうことに對して、私も精神的には倉橋  
先生の後について、子どもを守ることを貫いてきたつもりであり  
ます。これは、私が先生に接して、愛育研究所でいろいろお話を  
うかがっている間に、そういう話がいろいろ出まして、それに共  
鳴し、自分でもいろいろ言ってきたのであります。

### 日本保育学会の創設

日本保育学会の創設について、一番初めに、「始めようじゃな  
いか」と先生がおっしゃったのは、昭和二十三年です。さっき申  
しましたように、アメリカの教育使節団に最初の書類を出した時  
には、まだ学会はありませんでした。それで、仮空のものをつく  
って、その総裁という資格で、先生のお名前で建議書を出したわ  
けであります。ところが、「実際に日本保育学会をつくらうじゃ  
ないか」とおっしゃったのです。

倉橋先生は、「ほくは芸術家だからね」と言っておられたので  
ありますが、「これからの幼児教育は、科学的基礎をちゃんとし  
っかりして、その上に打ち立てなければならぬ」と非常に強く  
おっしゃられたのです。そういう面と、「芸術家である」という

面が、どうも初めの間、私の心の中ではしっくりしなかつたので  
あります。子どもを大事に考え、子どもを守り育てるといふこと  
が、幼稚園の園長や先生の仕事であると考えるのでありますけれ  
ども、それを貫くためには、科学的な基礎がなければなりません。  
このことを私もずっと感じてきて、それをちゃんとしなくては  
はといふことを考えて、「幼児心理学」といふ本を書きました。  
これは昭和十三年で、私が愛育研究所に入って仕事を始めた年  
です。そういう考えがありましたので、先生の口からその言葉が出  
たので、非常に感激したわけでありました。

戦後、私の住まいは、ずっと中央線沿線の小金井にありまして、  
先生のお住まいは、同じ中央線の中野駅の近くで、ありましたの  
で、よく先生のお宅にお邪魔しては、いろいろお話をうかがった  
りいたしました。確か昭和二十三年の春ごろだったと思います。  
(正確な記録は、日本保育学会の「保育学年報」に、私の書いた  
ものがあります)

「これからの幼児教育は、科学的な基礎がしっかりしていなく  
てはならない。その基礎の上に打ち立てるために、学会というも  
のをつくらうじゃないか」といふことをおっしゃられたのです。  
それで、私がおその下働きをさせていただいたのであります。たし  
か六月ごろに、「やはりつくらうじゃないか」と言うので、私の

記憶では、十三人ばかり心理学者、教育学者の間で幼児教育に関心があった先生方に集まっていたいて、倉橋先生のご指導のもとに始めたわけであります。

その年の秋、昭和二十三年十一月二十三日に、ちょうどこの部屋で、第一回の大会を開きました。当時は、研究発表の数が大変少なく、二十位しかなかったのです。研究発表をした者は、私共学者でありましたが、参加して下さった方はもちろん、幼稚園や保育所の現場にある先生方にも呼び掛けましたので、たくさんの方々に参加していただきました。このホールがいっぱいになりましたというのが、第一回です。その学会が、今年の五月には二十七回大会を持つようになりまして、千五百人の参加者がありました。

### 先生のご逝去・倉橋賞

先生は昭和二十四年に新制お茶の水女子大学をおやめになりました。お茶の水女子大学の名誉教授にられました。その後は、さつき申しました「幼稚園真諦」、「子供讃歌」の二著書に手を入れて出されました。同時に、「幼児の教育」、現在ここに編集部があつて、日本幼稚園協会の機関誌ですが、その編集を最後までなさっておられました。私共は、その協力委員ということで、お手

伝いさせていただいたのです。また、ずっとフリーベル館で出しております「キンダーブック」の顧問の仕事もされておりました。が、突如として、たしか脳軟化症で、昭和三十年四月二十一日に、お宅でお亡くなりになりました。

その前の日に、現在この大学の教授でられる松村康平先生が、ちょうどその翌日に日本保育学会をお茶の水女子大で開くことになっていたので、そのことの報告に行つたのであります。そして、「大会がうまくいくといいがな」というようなことを先生がおっしゃってくださった」ということを、追悼記に松村先生が書いておられます。そして、その翌月の大会のプログラムの中に、「先生の追悼講演をプログラムに入れることにした」ということも書いておられます。

その日本保育学会の初代会長は、倉橋先生でいらつしゃつて、副会長は私と、奈良女子高等師範学校、現在の奈良女子大学の教授であつた小川正通先生であつたわけです。先生がお亡くなりになりましたので、皆様のご推挙で、私が日本保育学会の会長を受け継ぎまして、現在まで至つて来たわけであります。

私の考えるところでは、先生は「幼児の教育」の編集、「キンダーブック」の顧問を一方ではなさっておられましたけれども、日本保育学会の発展ということを、非常にお心にかけておられま

した。先生は、晩年の情熱を日本保育学会にかけておられたと、私は受け取っているのであります。その日本保育学会の中で、私もその中にいたのでありますけれども、とにかく、私共学者ではなくて、「現場の先生方が、幼稚園や保育所の先生方が、もっと研究するようになる方がいいがな」とおっしゃられたのです。

私は、日本保育学会の研究は、学者と、現場の幼児に直接接しておられる先生方との、チームワークの研究がすすめられるようになりたいと、ずっと願っていたのです。その願いは、年と共にだんだん実現してきて、現在では、現場の先生方の研究も、ずいぶんたくさんあります。「保育」というものを、科学的な基礎の上に立てる」という先生のおっしゃった言葉が、現実には、日本保育学会の発展の中に生かされていると、私は非常に喜んでおります。

先生がお亡くなりになりました、ご遺族から、日本保育学会に、ご寄附をいただきました。それを元にして、私共は先生のお名前をいただいて、「倉橋賞」という賞を出すことにいたしました。倉橋賞は、その年の、日本保育学会の大会で発表された研究の内、優秀な研究にさし上げるということを、決めたわけでありませう。翌三十一年から実際に行つて、ずっと続いております。一人だけ賞を受けられた年もあるし、一人というよりも、一つの研

究で受けられた年もあるし、また、二つの研究で受けられた年もあります。今年の大会では、三つの研究が受けられました。

そういうことの中に、倉橋先生の子どもに対する非常に深い愛情というものを、現代に生かす仕事を、私共はしているということに、私は生きがいを感じます。それで、このようなお話を申し上げたわけでありませうし、これからもずっと続けていくつもりであります。

（講演の時申し落としたことで是非つけ加えたいのは、今の幼稚園教育要領の前身である保育要領を作る時、倉橋先生が事実上の委員長をなさり、「これは、君、三十年前に僕が考えていたことだよ」とおっしゃったことです。これは前に述べた、「幼稚園真諦」の復刊の序文のお言葉を考え合せてください。）

